11. IgA 腎症に対する二重濾過血漿交換施行例の検討

倉本充彦，辻　裕之，塚原佳代
中尾圭太郎，小川哲也，西川哲男
（横浜労災）

症例1，55歳男性。ネフローゼ症候群にて入院。腎生検でIgA腎症の診断。ステロイド療法等行うも改善なし。症例2，60歳女性。関節リウマチ治療中。尿蛋白の精査で入院。腎生検でIgA腎症の診断。ステロイド療法等行うもネフローゼ症候群を呈した。両者に二重濾過血漿交換（＋LDLアフェレーシス）を計12回施行，共に著明な尿蛋白，腎機能の改善をみた。ステロイド抵抗性かつ予後不良が予想される病態への有効性が示唆された。

12. 敗血症性 ARDS とエンドトキシン吸着の適応

星本相浩，加々美新一郎，吉田象二
（旭中央）

非心原性肺水腫の中でも敗血症性ARDSの予後は不良で患者の数十％が死の転帰をとるといわれている。今回我々は同疾患に罹患した55才の女性に対してエンドトキシン吸着（ポリミキシンB固定化カラム使用）と強力な抗菌療法を施行し，臨床症状の著明な改善をみとめた例を経験したので報告する。今回の症例で血中エンドトキシン濃度（エンドスペーシー法とトキシカラー法）は必ずしも吸着の適応の指標とはならないと考えられた。

13. 胆道・膵系癌に対する Remote after loading system（RALA）療法の治療経験

花岡英紀，竹田治代，国府田桂子
国吉　孝，大久保祐司，岸　幹夫
関　秀一　（横浜労災）

閉塞性黄疸にて発症した膵頭部癌2症例に対しRALS療法およびself-expandable metalic stent（Wallstent）を用いた内瘻化術を経験した。皮膚，眼球の黄染を主訴に来院し膵頭部癌による閉塞性黄疸の診断にて入院。PTCD，内瘻化術の後RALS療法を2回（20 Gry）行い2週間後Wallstentを挿入した。ステントの開存状況は良好であり合併症や長期予後を充分に観察する必要がある。閉塞性黄疸を伴った膵頭部癌に対しこのような集学的治療の報告はない。

14. 長期間 IGT として経過観察中に C 型慢性活動性肝炎を指摘され IFN 療法施行後に DKA にて発症した IDDM の1例

浅海　直，岩岡秀明，松尾　哲
松岡祐之　（成田赤十字）
金塚　東　（千大）

15年間IGTとして経過観察中にC型慢性活動性肝炎を指摘されIFN療法を施行後にDKAにて発症したIDDMの希な症例を経験した。IFN療法後5，6ケ月以内にIDDMを発症している他の多くの症例と比較し，本症例は発症まで22ケ月経過しており，今回のIDDMの発症につき，IFN療法の関与については不明である。今後，IFN療法を施行した症例につき，長期間の経過観察を検討する必要があると考えられた。

15. 尿中トランスフェリンと糖尿病性腎症

吉村直樹，福田勝之，木村　亮
西出敏雄，松島保久
（松戸市立）

当院通院中の糖尿病患者で蛋白尿陰性の258名につき，尿中トランスフェリンとアルブミンを測定し，糖尿病性腎症の早期診断としての意義について，検討した。尿中トランスフェリンとアルブミンは，強い正の相関を認めた。又，尿中トランスフェリンとアルブミンの正常値を1以下，15以下とすると，尿蛋白陰性者の半数以上に早期腎症を認め，尿中トランスフェリンは，糖尿病性腎症の早期の指標として有用であると思われた。

16. 検診後の内視鏡検査で見逃された胃癌症例の検討

笠貫順二，金子良一，江原和枝
山野　元，田辺邦彦
（船橋中央・健康管理センター）
大久保春男　（同・病理）
藤本　茂　（同・外科）

胃検診後の内視鏡検査で見逃された胃癌症例について検討した。症例は最終的に病理学的に胃癌と確定診断されたが，以前病変が存在したと思われる時期に内視鏡検査で胃癌はないと診断されたことのある4症例である。見逃しの原因としては，グループ3病変，内視鏡検査の困難な部位の病変，検査医の技量が未熟なことが考えられた。進行癌の段階で発見された症例もあり，要精査とされた症例のきめ細かなフォローアップシステムの構築が必要と思われた。